

聖 德 大 学
言 語 文 化 研 究 所

■
論 叢 11

ISSN-1346-857X

聖徳大学言語文化研究所 論叢 11		印刷	平成十六年三月十五日
		発行	平成十六年三月二十日
発行人		川並弘昭	
編集		聖徳大学言語文化研究所 〒二七一一八五五五 千葉県松戸市岩瀬五五〇 電話〇四七―三六五―一一二一(大代表)	
発行所		聖徳大学出版会 〒二七一一八五五五 千葉県松戸市岩瀬五五〇 電話〇四七―三六五―一一二一(大代表)	
編集協力		(株)エサップ	

©聖徳大学言語文化研究所

Printed in Japan

R100

本紙配合率100%再生紙を使用しています



本文用紙のみ100%再生紙を使用しております



聖德大學
言語文化研究所

■

論 叢 11

江苏工业学院图书馆
藏 书 章

はしがき

聖域なき構造改革を進める小泉内閣は「人間力戦略」を最重要戦略としています。そのための改革のメスは教育制度にも及び、「知」の世紀をリードする活性化された大学づくりを目標に、具体的方策として国立大学に対する独立法人化、国公私立大学の研究分野に対しての「21世紀COEプログラム」、教育分野での「特色ある大学教育支援プログラム」という徹底した競争原理を掲げています。この二つのプログラムに採択されるか否かは、その大学の研究・教育が国家または社会にとって価値あるかどうかであり、そのまま大学の研究・教育レベルの序列化に繋がり、大学が生き残るためには避けられない関門です。このような大競争の時代にこそ、研究・教育の両面で個性豊かな私立大学は生き残りましょう。

本学においてもそれに対処するための推進委員会を設けて鋭意調査準備中ですが、COEプログラムの採択には、大学の研究現況が大きく左右し、そのベースになるのが大学院と研究所です。大学院は、平成十年に児童学研究科、言語文化研究科各修士課程が発足以来充実には力を込め、平成十六年四月には、新たに臨床心理学研究科博士前期・後期課程、音楽文化研究科博士後期課程がスタートします。これにより児童学研究科、言語文化研究科、人間栄養学研究科、音楽文化研究科、臨床心理学研究科各修士課程前後期を備えた人文科学系の一大大学院に発展します。

この発展する大学院と補完関係にある研究所が、児童学研究所・生涯学習研究所・心理教育相談所、

そして言語文化研究所です。最も早く設置されたのが言語文化研究所で、大学の開設された翌年の平成三年に、専門分野を越えた高度な学術の総合的研究を目指して「川並総合研究所」を発足させ、その後、大学院言語文化研究科開設にともない、同研究科との補完関係目的に「聖徳大学言語文化研究所」に改め、研究成果を挙げつつ今日に至っております。

大競争の時代、大学の将来が研究所の研究成果にかかっているとの認識に立ち、言語文化研究所も研究発表・講演会等の日常の研究活動を行っていますが、それと並んで本年度も、研究成果を世に問うべく『言語文化研究所論叢11』の刊行となりました。いずれの学問分野においても研究は細分化の現象を呈し、ともすると研究の意義や方向を見失いがちな現在、本論叢の各論文が研究の本来の在り方を問うものであってくれることを願っています。

学内外の教育改革の大きなうねりの中にあつて、聖徳学園は昨年創立七十周年を迎え、日本の教育機関としては初のISO14001（環境マネジメントシステム）ISO9001（教育の質マネジメントシステム）との同時取得の快挙を果たしました。学園の構成員一同、創立者の築き上げた建学の精神「和」とそれに基づく活動が、世界的に評価され認められたことを誇りに思い、二十一世紀の日本を担う女子教育に邁進することを願っています。

御笑覧の上、御叱責、御提言を賜うことができれば幸いに存じます。

平成十六年三月吉日

聖徳大学長 川並 弘昭

目次

はしがき	川並 弘昭	3
------	-------	---

研究論文と言語		
——論文における科学言語と指示機能——	北村 弘明	11

『安心決定鈔』の神学	小川 修	73
------------	------	----

アメリカ先住民文学(5)		
——ジョイ・ハージョ、ヘメヨースツ・ストーム、リンダ・ホーガン、		
ウエンディ・ローズ、レイ・A・ヤング・ベア、トーマス・キング——	青山みゆき	109

音の相承——妙音院師長伝承の流域——	清水 眞澄	147
--------------------	-------	-----

隠喩としての植物	李 哲 権	187
----------	-------	-----

トマス・ハーディ『日陰者ジュード』		
——「ちびの時じいさん」の人物造形を巡って——	藤井 繁	217

もつとラディカルに、そして蛇を……		
——Lamia、虹色の蛇、「解釈」のアレゴリー——	長谷川弘基	241

聖徳大学言語文化研究所総覧 275

研究所構成員・研究所経緯

講演会記録・研究会記録

研究所講座記録

『論叢』総目次 313

あとがき 337
山口 博

研究論文と言語

——論文における科学言語と指示機能——

はじめに

北村 弘明

われわれ研究者のあらゆる営為は、最終的に「研究論文」という形態に収斂されていく営為であると言えよう。それは単に目的・結果であるというだけでなく、研究活動の辿るべき経緯・指標でもある。つまりその時々々の探究のあり方は、いずれ一つの終着点になるはずの未来の論文側から逆に促され、吟味され、導かれるということになる。論文という未来の研究結果を想定し、それを前提として自覚すればこそ、始発点、進行中での茫漠とした状況にあっても、研究者はある程度の見通しと、次に踏み出すべき方向とを予測し得る。実際に論文を書く、書かないに関わらず、少なくともその研究営為は悉皆、努めて「論文的」でなければなるまい。その意味で論文とは、もはや結果としての「形態」のみに価値があるのではなく、「研究活動のあり方・内容」そのものを支え、誘導する力をも担っている。

学術研究が、場当たりの試行錯誤や単なる実験・調査報告、あるいは感想・直感の羅列というレ

ベルと一線を画しているのは、この「論文的である」ということが根幹にあるからだ。すなわち、研究者はその時々、自らの研究が論文的営為でありたい、と意識することによって、論理性と歩むべき方向の選択判断を混沌の中から見出すのである。むしろ、現実には完全なる論理的判断・推論をものにするのが稀であり、常日頃はそこに感情的判断が絶えず介入する余地があるとは言っても、一々の判断を完全なる恣意的な賭博から救い出すのは、けっさくこの論文的態度というスタンスである。「論理的なものごとを考える」とか「合理的な思考過程を重んじる」とかの、学問的心がけが、過たず実践されるために、論文という存在が研究者を喚起する力の少くないことは言を俟たない。そればかりか、研究者は実際に論文を書くことによって、論理的思考を促されることが常である。

さて、当然のことだが、かような「論文」とは、実は紛う方なき「言語」である。あるいは一つの言語のあり方、と換言してもよいが、いずれにせよ、論文という言語は、それが論理的言説であるということに究極の価値を置かれ、またそれがゆえに堅牢な「指示機能」を付託された表現であることが期待されている。論文が指示機能の明晰を謳う科学言語によって書かれているのは、その論文が見出そうとする何らかの真理を的確に「指示したい」と欲するからにはかならない。この点においてはいかなる論文にも「真理の指示」という共通した姿勢があるはずで、逆にそれに失敗したものは厳密には論文とは呼び難いという立場も生ずることになる。

拙稿の眼目は、こうした研究（学術）論文という言語実態を「言語機構」という観点から分析することにある。すなわち、論文を紡ぎ出す科学言語というものの特質、そしてそれがどのように使用され、何を表現し、いかなる思考形態を醸成していくものなのか、等々。加えてそこに何らかの限界性（ここ）言語の自閉）はないのか、ということについても、その問題の一端を探ろうとするものである。

ただし、論文という言語のことば遣い・構成などを単に文体論的な視点から概括することや、文章論・

論文作法を述べ立てることなどが拙稿の眼目なのではない。この点をいまい少し明らかにしておくため、以下、煩瑣になることを承知で、言語機構分析ということの枢要について、最小限の確認をしておこうと思う。

「言語機構分析」という場合の「言語」とは、ソシユール F. de Saussure 言語学でのいわゆる *langue* と *parole* を包括する *langage* という概念にも通じるが、あらゆる人間の認識・思考形態そのものを言語的機構として拾い上げる謂である。それは徒に大風呂敷を広げて、無制限に分析対象を拡大してみせる「何でも屋」を演じたいがゆえの措置なのではない。人間のあらゆる知的活動や認識のあり方そのものが、他ならぬ言語に依拠してはじめて可能となつていくこと、すなわち、われわれのあらゆる精神活動が、まずは言語を礎とするところから生じていることを前提にすればこそ、その必然としてあらゆる人間の営為が言語的営為として押さえられねばならないとする本性によるのである。安易に誤解されることを敢えて怖れずに極言すれば、それは「人間化機構」の分析と同義にもなるものであり、その分析前提としての「唯言論」的立場を表明するものでもあった（拙稿「始原言語と超シニフィアン」「言語文化研究所論叢7」参照）。

一見、言語的営為とはまったく無関係にも思えるわれわれの想念や身体活動、感覚といったレベルの諸事象さえも、完全に言語から切り離されて成立・発現されているものは、人間の日常営為にあつて、ただの一片も無いと断言してよい（俗に言う「第六感」などという意識さえ、もはや言語と無関係ではない）。かような文脈のなかで、今回、その一つの注目すべき言語態である研究論文という言語の実態を分析しようとするのである。

拙稿自体が「論文を論じる論文」というトリッキーで矛盾を孕む構図になることを十分覚悟の上で、以下、言語探究の筆を進めていきたい。

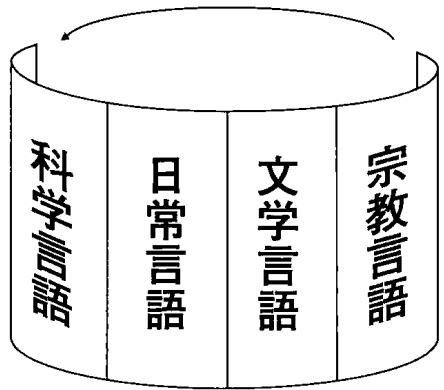
一 言語態の分類と位置づけ

—— 指示機能の違いによる言語の分類

研究論文が科学言語で書かれるものであるということを前提とするについて、最初にこの科学言語なるものの位置づけを明確にする必要があるだろう。これまで筆者は多種多様な言語態の分析に有効な分類のあり方を模索してきたが、言語機構分析の一連の研究活動などを通じて、言語の「指示機能」というヒントを得、それによる分類を試みた。いま、この分類（第1図）の概要を説明することで、科学言語の特質を他の言語態との関連から確認しておきたい。

そもそも、言語機能としては一般に「伝達機能」「概念化機能」などがその代表的なものとして挙げられることが多いが、これらは究極、「指示」という観点から統合することができる。すなわち、伝達機能は伝達すべき内容を言語が指示し得ることによって可能なのであり、また概念化機能の方もその概念自体を最終的に言語が指示し得ることによって可能となる。さらに考えれば、伝達される内容ということもけっきょくは一つ概念なのであり、どちらも言語が或る概念を指示し得ることによって可能になる言語作用であることに大差はない。言語が「言語記号」という別称で呼ばれるのも、それが「何かを指さす」という記号原理を実践する存在だからであり、言語において指示機能を有するということはまさにその生命そのものである。

しかし、「言語は常に同じ条件、同じ方法をもって、種々の概念を指示しているのか？」と問えば、そこには一律とはいえない難い多様な実態があることにわれわれは気づいている。その指示のあり方の差異によって分類を試みたのが第1図であるが、ここでは「科学言語」「日常言語」「文学（芸術）言語」



(第1図)

「宗教言語」の四分類としてそれぞれの言語をこの配置で並べてみた。ただし、この四分類の境界は、後に述べるように、いつも明瞭かつ判明なものとは限らず、時として互いに重なり合ったり補強し合ったりする関係にもある。これは、言語記号が一般記号とは異なる特質を有するというところからの帰結なのであるが、詳細については後述に譲り、いまはそれを指摘しておくにとどめよう。

この分類図は一枚の平面図ではなく、それがぐるりと円筒をなす循環構造をとることを筆者は意図している。つまり、平面図で一見、対極の位置にあるかのように見える科学言語と宗教言語は、円筒構造にした場合、それぞれが互いに隣接し合う位置関係にも来ることを示したのである。これは、両者が互いに対照的な性質を有すると同時に、かなり類似する側面をも共通してもっていることを明確にしたいための措置であるが、これについても後に順を追って述べることにしたい。

一―二 科学言語の指示機能

図の左端の「科学言語」は、主として学問・科学の世界において用いられる言語である。ゆえに、論文の言語はここに位置づけられるが、その特質は、その言語とそれによって指示される概念とが強固に連結されているということにある。この意味では連結というより、凍結されていると言った方がイメージに合うかもしれない。たとえば、言うまでもなく化学での「H」は「水素元素」を、また数学での